

広報 すぎなみ

Suginami



支えあい共につくる
安全で活力あるみどりの住宅都市 杉並

{ 5/15 }
令和元年(2019年)
No.2254

高円寺とわたし

あの頃と、これからと。

昭和、平成、そして令和。時代の変化とともに、さまざまに形を変えながら息づいてきた町、高円寺。この地に生まれ、この地に育ち、少年時代の体験をもとに書いた小説「高円寺純情商店街」で直木賞を受賞したねじめ正一さんに、少年時代の思い出、現在の高円寺の魅力、そしてこれからの町への思いを語っていただきました。

特集



すぎなみビト

ね
じ
め
正
一

Contents — 主な記事 —

6 | 住民税(特別区民税・都民税)のお知らせ 10 | 6月は子ども読書月間です 16 | 東京2020大会 永福体育館がイタリアビーチバレーボールチームの事前キャンプ地に決定

〒166-8570 杉並区阿佐谷南1-15-1 | ☎ 3312-2111(代表) FAX 3312-9911(広報課直通) | 🌐 区ホームページ: <http://www.city.suginami.tokyo.jp/> | 📄 発行: 杉並区 | 📝 編集: 広報課

広報すぎなみは月2回(1・15日)発行。新聞折り込みのほか、区の施設・駅・コンビニエンスストアなどの広報スタンドに設置しています。

高円寺の町と人。そのパワーが僕を育ててくれた。



すぎなみビト
interview

ねじめ正一

プロフィール：ねじめ正一（ねじめ・しょういち）作家 昭和23年生まれ。昭和56年、詩集「ふ」で日本文壇、平成元年、小説「高円寺純情商店街」で直木賞を受賞のほか、数々の賞を受賞。実家は現在の高円寺純情商店街にあった甲州屋乾物店。熱狂的な長嶋茂雄ファンとしても知られる。

—子ども時代の町の記憶を聞かせてください。

小学生の時、まだ高円寺駅が高架になる前、いい仲間がいて、野球やったり、自転車乗ったり、歩いて新宿まで行ったり、楽しかったな。蚕糸試験場の近くで祖母がお菓子屋をやっていて、祖母からお菓子をもらおうとみんな喜んでね。歩き疲れた頃に新宿に着いて、伊勢丹、三越の両方に寄って。エレベーターに乗ったり降りたりするだけなんだけど楽しかった。伊勢丹は食品の匂いがしていたな、あの時代は町に匂いがありましたね。畳屋さんは畳の匂い、お風呂屋さんはお風呂の匂い、乾物店はすめと煮干しが混じった匂い。職業が商売の匂いをさせていたな。

—今は町に匂いがありませんか？

畳屋さんも、お風呂屋さんも少なくなっちゃったし。だから、あの頃はあだ名が直接的でしたね。和菓子屋なら団子、俺なんかニゴって（笑）。しょうがないよね、実際に煮干しを売ってるんだから。子どもからも子どもらしい匂いがしていたね。今の子どもたちがかわいそうだと思うのは、大人と子どもが同じ方向を向いているなって。僕らの頃は、大人は大人、子どもは子どもで違う方向を見ながら生きていた。

—子ども時代に熱中していたことはなんですか？

野球が好きで、少年野球チームに入っていて。時々、長嶋さんのスライディングってどんな風になっていたかと思うと急に廊下で始めたりしてね。女の子に「ねじめくん、どうしちゃったの？」って言われるくらいその気になってやっていました。野球は子どもたちの優先順位の1位で、勉強ができて大したことないって思いながら暮らしてたな。

—そんな野球少年が言葉に出会ったきっかけは？

中学2年の時、担任の志村先生に「詩人になれる」って言われて詩を書き始めて。野球は自慢だけど勉強できないというコンプレックスがあって、バランスが極端なんです。でも詩を書くとか気持ちがスッキリする。自分の感情を発見するという意味で大きかったね。あとはおやじが俳句をやっていたのが一番大きいか。商売よりも俳句に没頭している姿が子ども心にも印象的だった。



高円寺駅(昭和27年)

—お父さんは、俳句がお上手だったのですか。

「商談に一間とられて 梅雨の子よ」というおやじの句があるんですけど、息子に対する思いとか、本当にうちで一問しかなかったんだとかね。いい俳句ってねじめ家の歴史であると同時に時代を感じられる。今、民芸店を続けているのは、おやじが俳句をやめてやっと見つけた民芸店っていう商売が軌道に乗ろうという時に病で倒れたので、なんとか続けてやりたいという気持ちからですかね。だけどおやじの俳句がうまかったから、おやじを認めていたところがあるからだと思う。



—町の人々との交流、思い出を教えてください。

高円寺って、関東大震災で向島から焼け出されて移り住んできた人が多かった。だから下町の心意気を学ばせてもらったというのがあります。杉原クリーニングのおじさんとかね。相撲が好きで、子どもを集めて相撲大会をやったり、すごく思い出がありますね。柿沼カバン店のおばさんはいい人だったな。「正ちゃん」って呼び方が優しくて。モンブラン洋装店のあか



ねちゃんはお母さんが作った洋服を着ていて他の子と違うんだ、おしゃれだね。洋装店の手前には中華料理の美華さんがあったな。ここにはテレビがあってね、プロレスの日にはおやじが一等前をとっておいで来て、お店の人も甲州屋の息子さんだって覚えてくれてね、そういう特別扱いがうれしかった。もちろんいい思い出だけじゃなくて、つらいこともありました。それも含めて高円寺純情商店街。僕が高円寺の名前で小説を出して、一番喜んでたのはおやじ。おふくろよりもおやじが喜んでたかもしれないね。

昭和30年代の高円寺北口の「高円寺銀座商店街」(現在の「高円寺純情商店街」)をモデルに、商店街で暮らす人々を描いた連作短編小説。



▲「高円寺純情商店街」ねじめ正一/新瀬文庫

—現在の高円寺の商店街はねじめさんにはどう見えているのでしょうか？

南口の商店街を見ているとよそから来た若い店主が多い。地元によく溶け込みながら商売している。そういうのを見るといいなって。後から来た人の方がどう商店街を盛り上げていこうか考えているのをすごく感じるね。今着ているシャツの店もそう。僕のシャツに対する思いに乗ってきてくれてね、大したもうけにはならないと思うんだけど。こういうものができたらいいよねって言いながら付き合えることができたらと思います。僕ね、商売への思いが一番感じられるのはお客さんが帰る時だと思うんですよ。買わなくても「ありがとうございます」と言えるかとか。そう言える店が、商店街にある町は力があるんだよ。

—元号が令和に変わり、新たな時代が始まりました。これから商店街はどうなってほしいと思いますか？

うちのおふくろも認知症でしたけど、これからは福祉の問題が大きいかもしれないね。そういうお年寄りに対応できる商店街を積極的に考えているということ売り物にしていくような。お年寄りだけでなく、例えばうちの孫が保育園に行ってますけど、行く途中で果物屋のおじさんがいてね、孫に手を振ってくれるんだよ。ごつい顔してるんだけど、孫は好きなんだよね。なにを売っているかも大事なんだけど、それだけじゃない時代が来ている。人に対してどれだけ対応できるか、きめ細かさというのかな、そういうものが求められていると思う。それを考えるからこそ、どういもの売ればいいのか浮かんできるといこともあるんじゃないかな。



ねじめさんが

Favorite place /

好きな場所と風景

高円寺で生まれ育ち、現在も周辺をよく散歩しているねじめさんに、足を運んでみてもらいたい場所や風景を聞いてみました。



高円寺仲通り商店街と送電鉄塔の風景

「高円寺駅から西方向に延びる商店街。飲食店を中心に新旧の店舗が融合し、いつもにぎわいに満ちているね。商店街の先にある白く大きな鉄塔を見ると、なんだかパワーをもらえる気がするんだ。」

[DATA] 高円寺駅北口徒歩0分



山形県飯豊町 アンテナショップIIDE

「高円寺純情商店街の中ほどにあり、山形県飯豊町を中心とした山形の名産品がそろっています。特におにぎりがおいしくて。お米やお酒など純情商店街とのコラボ商品もあり、町を盛り上げようとする若者の活気を感じるね。」

[DATA] 高円寺北2-7-6 / 午前10時～午後8時(無休)



民芸品・和雑貨・手ぬぐいなど ねじめ民芸店

「私の父が昭和41年に開き、その後私が引き継ぎました。全国各地の職人が作った色鮮やかな和柄の雑貨を集めています。阿佐谷パールセンター商店街にあり、買い物途中の方々や子どもたち、最近では外国人観光客などでにぎわっていますよ。」

[DATA] 阿佐谷南1-35-19 / 午前11時～午後8時(不定休)

すぎなみビト
MOVIE

「ねじめ正一さん」のすぎなみビトのインタビューが動画でも楽しめます。右下2次元コードからご覧いただけます。

YouTubeで配信中! 杉並区公式チャンネル

